戦後長崎における野口彌太郎の滞在に関する考察
―昭和二七年野口彌太郎の日記を中心にして―

入江　清佳

はじめに

野口彌太郎（一八九九～一九八三）は、大正から昭和にかけて二科会及び独立美術協会に所属、活躍した洋画家である。

流暢な筆致と天成のものと評される色彩に特徴を持ち、昭和四年（一九二九）にヨーロッパに渡ると、《門》《巴里の眺》フランス市庁買い上げとなった《港のカフェ》など洒脱な作品を描いた。帰国後は、昭和五年（一九三〇）に二科会から独立し結成された独立美術協会に在籍し、独立展を中心に活動する[1]。野口は国内外を広く旅し、土地の風景やその中で生きる人々を生き生きと描いた。国内では、昭和二〇年（一九四五）以降は戦前から取材していた北海道と、父親の出身地である長崎を特に熱心に描いている。

野口が長崎を頻繁に訪れた昭和二〇年代から三〇年代にかけては、中央画壇で活躍する画家たちが多数長崎を訪ね、個人の展示会や団体展が盛んに行われた時期でもある[2]。地元の画家の間でも昭和二〇年一〇月に長崎洋画クラブが結成され、昭和二五年（一九五〇）には長崎市美術振興会が創立、一一月には第一回長崎市美術展（現在の長崎市民美術展）が開催されるなど、美術に対する機運が高まっていた[3]。

野口の画業については、昭和五三年（一九七八）に発行された日動出版の『野口彌太郎画集』に歴代の代表作及び年表等が記載され、基礎資料となっている[4]。また、阿野露団の『長崎を描いた画家たち（上）（下）』には、長崎での活動の様子が記載され、展覧会図録や長崎の地方新聞などにも野口について書かれたものが多くみられる[5]。しかしながら、『野口彌太郎画集』は野口の画業全体を記録しているが、長崎での野口の業績に関する記述は僅かしかない。また、阿野の『長崎を描いた画家たち（上）（下）』は長崎を訪れた中央画壇の画家たちを一人ずつ取り上げ滞在時の主な出来事を記載しているが、内容は概略的であり、展示会等の漏れや裏付けが明確にされていないものが散見される。したがって、野口の長崎での滞在を詳細に分析している研究は現状確認できない。

本稿では、長崎市長崎学研究所紀要『長崎学』第二号に掲載した史料紹介「長崎に関する野口彌太郎の日記について」及び『長崎純心比較文化学会会報』第一三号に掲載した「長崎に関する昭和二六年野口彌太郎日記について」で触れた昭和二五～二六年（一九五〇～五一）に続き、昭和二七年（一九五二）の野口彌太郎の長崎での滞在について、滞在中五回行われた展示会、制作された作品について、野口彌太郎の日記、当時の新聞記事等を用いて分析を行う。ここでは野口の長崎滞在を詳細に検証すると同時に、戦後昭和二一年に野口が長崎を訪れて以来、長崎滞在をサポートした長崎美術界の面々、彼らが創設した長崎市美術振興会、長崎市、長崎日日新聞社、長崎での個人の協力者などとの野口の関わりから戦後長崎の美術界復興期の様相を明らかにし、長崎の地方美術史における野口の貢献と昭和二七年に行われた各種文化事業における諸団体及び個人の協力関係を検討する。

【表一】に掲げる昭和二七年野口彌太郎日記には留意する点がある。この年、野口は一度日記帳を紛失しており、二月一六日の日記に「浜屋会場、医、会館見分途中で日記帳を紛失す」とある。その

月　日	内　　容
3月27日（木）	（諫早へ作品おくり）曇　吉田君来訪で四人で打合せ同君より立替への合として6,000 - 受取る。同君宿支拂いをスミ　小林氏より15,000 - 受取る。宿支拂いの10,000渡し。山本君方10,000立替　女中1,000　山本君分1,000 -
欄外：12,500 - 今日サイフ	
3月28日（金）	諫早展　晴　山本君から20,000 - 送金。諫早。山本君から電話。書面、電報、送金（村井1,400 - ）4h30大浦で25Fをかく。5.30 - 7h帰へて8h44諫早着。二の丸荘泊1hねる
3月29日（土）	諫早展　晴　6h前言所へ行く。作品箱が開かれていた。10hトウナンを見はる。シモンをとる。買い物へ出る。父来校。清水君と山一証券の件。スケッチ3F肖像　7.30h-1h諫早コン親謝礼（3,000 - ）山本の時計、私のヅボンと金10,000 - サイフとも
3月30日（日）	諫早展　晴、曇　11h、朝、中食、本多、young正林来訪。警察により会場を見る。Teaウナギヤ正林、本多兄弟と写生3F.7h10で長崎へもどる - 急行bus　四海楼山本と二人11hかへる。
Fri（20,000 - ）Wed（15,000 - ）Turs（15,000 - ）Sat（3,000 - ）・展覧会雑費欠ソシ10,000弱と5人で一人2,000 - くらい・関係者へのTea20人として吉田立替分（6,000 - ）	
欄外：mokuのことで吉、山、一同神経　へとへととなる。	
3月31日（月）	Mokuda来訪。りようかいに来る。夕方写生に出られず中止。夜で夕食。外出せず早くねる。
4月1日（火）	晴　父来訪。小倉■織所行作品を発送す10F　中食。3.30hかへらる。母へザボン半ロンを送る700-（長崎大浦）4.30h-7h大浦写生今日すゝまず　古本屋によばれ夕食馳走になりねる。1hかゝる　丸善寫物1,100,-島村方へ電話6,00-
4月2日（水）	晴　楢村氏来訪で作品を部屋にかけることゝする。来客。二■。2h - 6.30h古賀娘肖像8F　2枚。大浦行を今日はやめ、9h四海楼食堂で夕食。吉、山三氏。マダム旅行からかへる。ナナに行　2hかへる。
4月3日（水）	晴　11hおく光風堂とヅボン地を見て歩く、2-4.30h古賀京子の肖像8F出来ず　5.30-7h25F内sasayama邸で試たが失敗　夕食宿で後shieu50 1,000ロマンにより吉岡君と話す。
4月4日（水）	快晴　1hかへる。ひるね。3h-6.30h肖像8F一枚仕上る　夕食は明日moku出立につきペーロンで1,030-各自支払い1,030帰館支払1,050-　poimer my sey
4月5日（土）	（吉田君今日出立）快晴　吉岡君から送金5,000 - 岡政taelin訪問　3h-5h肖像つゝきたゝし中古賀氏来訪小野の件。諸谷氏来訪。5.30-7h6F丘の眺。夕食は宿で一人楢村氏来訪。古本屋主人来訪。
4月6日（日）	晴　荒本氏来訪山本君ともヅボンを見な外出　Tea.3-hハタアゲで唐八景に行くear400.-　大浦へ下り今日は写生せず　サラウドン400.-宿で日本酒をのむ。吉岡、山本君外出
欄外：吉岡君から5,500 - 返金	
4月7日（月）	雨、強目　加筆。午後諸谷氏来訪　加筆進まず　吉、山3人で四海楼後ロマン1,000 -　ナゝでのむ。山本君と二人岡政の渋岡君とギヤバジンを求め（3,500 - ）借款
4月8日（火）	うすぐもり、モヤ　二の丸荘主寸志として3000- 12h起床ぼんやりしている。加筆も進まず9.30h大浦の国警隊長訪問。山本君と諫早トウナンの件。5h-7hお寺3F,4F　うすぐもで工合良し。宿へ帰へって夕食後外出　吉岡君とロマン1hかへる800,-
4月9日（水）	快晴　山本君と打合せなど岡政へfitting　2.30h-5hスワ神社へ写生4F一枚。6 - 7h大浦お寺の社で加筆と3F一枚。宿へもどり松岡等と夕食タイチリ。諸谷氏来訪など
4月10日（木）	モヤ多し、快晴　10h,;ベルニーと加筆。3.30h-4.30hスワ神宮：モヤ多くて写生中止。ひるね　5-7h2日目大浦お寺の庭を3F二枚。唐へ帰へり山本君と夕食。謙へ電話
4月11日（金）	曇、夜は雨　山本君より10,000 - 返金。これで同君より■30,000 - 返金となる。 小品加筆。4.30h-7h寺の庭で3Fと4F　8h小林氏来訪ウイスキーをもらい四海楼でのむ 日本画をかく。後ナナ：ロマンに行く
4月12日（土）	小雨と曇天　ひるね。諸谷氏来訪。打合せ：松岡君4h来訪で今日は写生中止 夕食三人で早くたべる。 tel、小倉　謙宅より電話
4月13日（日）	曇、光あり- 作品加筆。青年来訪。松岡君来訪で4.30h-7h寺の庭と波止場で写生。6F,3F,6F帰館。松浦氏来訪で一緒にビール夕食。書面。オリーブ油200.- Tel小倉
欄外：Tue.二の丸荘の3,000 - の内1,000 - 山本君へ 吉岡君へ1,000立替へ Fri（10,000 - ）山本君より返金	
4月14日（月）	曇　11h諸谷氏と市役所訪問。ケイリンの作品のこと。島原のこと。営林署長訪問。長崎ソウコ訪問同行して宿へ来らる。吉岡君へ1,000 - 立替。
4月15日（火）	晴　山本君から5,000 - 返金のこと山本君高工会□門へ行く。エツ子女にTip1,000 -
4月16日（水）	（11-3h築地：福幸にて湯澤三千男氏祝会）四海楼で夕食後ロマンによりおそくなる1,400- 1,000-
4月17日（木）	（展示会一日目）強風　会場へおそく出る。芝野氏に招待され諸谷、楢村君等と□ベッコウ屋によりカフエーによりだいおよふ
4月18日（金）	（展示会二日目）快晴　長崎競輪の絵を用意。光風堂から、新之明画へ色紙送付。千代田銀行、で五万受け取り宿へ支払ふ。会場、6F4F2,3F2,8F（中部氏）
4月19日（土）	芝□会の分3万・・を受取会場で中部氏脇山氏と面会。光風堂、丸善、床屋により宿へかへる。
4月20日（日）	佐世保行　強雨後晴　10h30顔をあらふ 松岡君をさそい佐世保着5.30h夕メシ150-　鶴見荘支払い　40,000 - 吉岡1,200 - 山本9,000 - これに加へて3,000 - 当方支払い 吉岡君へ1,200返金。山本君と佐世保へ来る。
欄外：Mon.吉岡君へ1,000 - 立替 Tue.山本君に5000,-送金のこと 鶴見荘今日迄（40,000 - ）（12,000 - ）（9,000 - ）3,000 - を加ふ	
4月21日（月）	（佐世保）快晴　山本君北村氏訪問。水彩。街を一巡Sauing ercam帰館4 - 5 h時事新聞ザダン会 夕食林田君と三人。原稿を書く。2 h寝る
4月22日（火）	（佐世保展示会）快晴　のみすぎで気持ちわるし。11h会場へ出る。色紙をかいて帰へる。ひるね。林田両人来訪。色紙を10枚かく。3h頃ねる
4月23日（水）	（佐世保展示会）曇　色紙色つけ。買物へ出る。坂田、田中市■とウドコエへ行く。テン望■し。中食は田中丸氏も一緒。会場へもどる3F一点と山本君の6F山本君より返金3,000,1,000返金15,000 - 受取る。
4月24日（木）	島原　雨終日　吉岡君より10,000 - 返金。相変わらずken式 出立の用意。光風堂内金として20,000 - 支拂い諸谷氏と面会。2.30h発　島原南風荘。夕食、卜川支店長来訪。
4月25日（金）	島原　雨後曇　強風　この日、色紙を■■　20枚（700,-）15,000-材■。書面。打合せ。小■展。その他3h車で小川君と町を見る。城跡（森竹城）町のゆき氷。帰ってひるね。6-7.30h白山で25Fをかく。オデンヤで小川君の馳走になり町を一巡　帰館。小川君と等とのむ。1h
4月26日（土）	快晴　島原　晴　鉄砲町に写生6F - 見 ハク山へ行き昨日と別に30P - 山川氏に招待され後一周□てかへる。
4月27日（日）	（島原）12hすぎ。市長、皇□氏など□々,-を訪問。■■湖を見る。後、鳥の水たき
欄外：Wed　3F一見（15,000 - ）親和銀行 山本君より返金（3,000）光風堂20,000,-　Thurs.300,000を 山本君■■5h-7h城山写生■成	
4月28日（月）	（島原 - 長崎）強風　朝4時まで色紙をかく。10h発小野により父上不在長崎へもどる 出立用意。四海楼。諸谷50,000 -（ケイリン）、70,000 - elrk、50,000四海楼、楢村、小林、ロマン支払い4,000 -
4月29日（火）	（長崎発）12.30　島原市夜の□□場25号で10万円 店へもどり11.30h-12h市長、国警、竹次郎知事を訪問 午後5.30カクテル，パーテーelrig　謙宅Tel3665,（20人まで）小倉発、12h30

【表一】昭和二七年の野口彌太郎日記

月　日	内　　容
2月16日（土）	曇、小雨　浜屋会場、医、会館見分途中で日記帳を紛失す
吉岡君へ　3,000　吉岡宅へ郵送　5,000　この前にすこしあると思ふ。東京へ送金と■■■君 二月二十六日 -3,000、三月五日－ 2,000、十二日－ 1,000、三月九日－ 2,000、十六日－ 1,000、二十日－ 1,000	
2月19日（火）	加筆すこし。夕食はスキヤキ後浜川、荒木君来訪。後ロマンなどでのみおそくかへる。
2月20日（水）	魚スキ夕食。8h 民友社の洋画放談会。
2月21日（木）	（長崎美人しんさ会）晴　後　荒木君と一同四海楼から maruyama を歩く。
2月22日（金）	曇　午後　山本君と水田の屏風を見に行く　吉岡君来る
2月23日（土）	11h 瀧口ミドリ女肖像 8F2 枚　大浦へ写生。
2月24日（日）	大村行。4.05 着から浜川君結婚式　10h 長崎へ帰へり山本。荒木とフロリダ。ナナ。3h かへる。ミドリ女加筆
2月25日（月）	雨 市長来訪で 100,000 礼金を受く
2月26日（火）	夕食後　放送洋画放談打合せ（15 台）7h から宿で
2月27日（水）	小林敏宅に招待。吉、山、楢、四名　4h にかへる。
2月29日（金）	明晴　会館で制作。午前中荒木君案内で浦上で写生 10F　ロマンから歩きまわる。
3月1日（土）	雨　吉岡君をとめる。ひるね 6.30h 放送四人。夕食後吉田君宿を出て山口方へうつる。
3月2日（日）	曇　竹田助役来訪。種村君来訪キンレイで中食。今日は制作休み　10F 長崎の眺を白木へ送る
3月3日（月）	（浜屋会場決定）諸谷：教育課長来訪 ひる田中丸、堀氏四海楼にありのむ 会場へ行都合悪く大浦で 10F 半成 ナナ、月山 4,300-
3月4日（火）	雨　書面。会館 40 号加筆すゝまず　種村邸に招待され色紙をかく。ロマン。
3月5日（水）	小雨　四海楼 12h かへる
3月6日（木）	書面。3.30 - 6h 会館モデル二人　夜、木下義育氏によばれ Haraitei.aoba　12h 過ぎ　木下、秩■同宿す。
3月7日（金）	2-4.30h 四海楼マダム肖像 10F：8F　今日会館を休み。吉田君から送金 10,000 -　ペーロン 2,000 -
3月8日（土）	原稿
3月9日（日）	雨　会館で加筆 7.30h 荒林■長宅に招待　水野、諸谷、四海楼マダム大いによふ　山本、吉岡君へ 1,000,- 実■
3月10日（月）	午後山本君と三菱石油訪問。モデルだめで部屋で加筆。種村君と招待されペーロン。ウイスキーをのむ　Shieuso1,000 - ロマン
3月11日（火）	12h かへる四海楼に絵を見に行き小林病院により注射。会館 4.30- 5.30 モデル二人　夕食タイチリ　浜川夫妻、荒木来訪。のむ。ナナ、ツバキ 1,000 -（今日一万引出し）
3月12日（水）	晴 吉、山本君に 2,000-、2000- ひるね三人で大浦写生 国警の三階から 10F をかく。肉スキヤキ。後色紙を 10 枚かく 3h ねる
3月13日（木）	（朝日の色紙発送）雨　すこし加筆。4h - 6h 会館で加筆　小林明、荒木君来訪吉岡君と四海楼食事。11h かへてねる。吉岡君は 1,000 -
3月14日（金）	（日記帳来る）快晴　書面。午後 4-6h 会館で 40P 終りとす。夕食の時小林敏氏来訪ウイスキーを馳走になりのむ。引出せず。
3月15日（土）	曇　原稿をかく。4h 国ケイにより sawayama 邸で 10F　二枚かく。夕食タイチリ。中村女、浜川君来訪。新中川町の往復してロマンでのみ。日国でのむ。吉岡君と
3月16日（日）	晴　11h 起床。30F を張る。光風堂で 10F2 枚　コーヒー　中村女と車で国警の三階から 30F －コンディション悪しを写生 - 6.30h 四海楼で夕食。四海楼で夕食。ウイスキー吉、山、中村女を車でおくる。
3月17日（月）	晴　正林、藤井氏来訪　30F を張る。~~村岡君と~~ sawayama 邸へ写生。少年と 30P を夕方はじめる。- 7h　宿で夕食。　一回目
3月18日（火）	作品加筆。古賀娘写生 3-4.30h 失敗す。楢村氏と sawayama 邸へ写生　二回目　宿で夕食。外出せず
3月19日（水）	雨強風　加筆作品。会場を見る。古賀娘写生中止。ベルシーいろいろ。4.30h 写生は風で中止して作品加筆。7.30h 山、吉、モロタニ氏四海楼に招待する。画帳と色紙をかく。
3月20日（木）	快晴　来客、電話、茂藤部長など加筆出来ず　作品を会場へおくる。4.30 - 5h 会場かざりつけ 5.30h- 7h sawayama 邸で 30F 三回目　帰館夕食。島原、浜川君来訪。南風、ロマン 1h かへる。会費 10,000 引出し。1000 - づゝ山本、吉岡君へ
3月21日（金）	（長崎風物独立五人展）快晴　9h かき 30 F、10F を会場へはこぶ　中村、その他絵をかく A.B.C.C 連中来館。~~宿で夕食~~　四海楼で長日、ヘン輯長、浜川氏等と夕食
3月22日（土）	会場へ作品ベルニーとゝ゛け。ケイリンの□を仕上る。似顔をいろいろ。宿で夕食　吉岡君は小林方へ山本君と古本君に招待さる。後ロマンなど
3月23日（日）	1h kankoHotel - 3h 長崎女性との会談　ソバ、山本君と会場に似顔フジエ夫妻の肖像他。宿で夕食。水田で画帳などいろいろかく。- 3h かへる。
3月24日（月）	アラレ：強風　父来訪　漁村の春のこと。ペーロンで中食　1,100 -　第□単 400,- 菓子 1,000 - 父は 3h でかへる。似顔をかく三人。楢村氏にデッサンを見てもらふ　夕食後画帳をかく。吉田君の件
3月25日（火）	曇後晴　正林氏来訪。原稿をかく。光風堂、会場。今日写生中止水彩などをかく。8h 過ぎ埴君宅に招待大いにうまし。軸田の夕ぐれの町をかく。3h ねる。
3月26日（水）	曇　12h おきて諸谷氏を訪問。帰館して岡部邸へ行く。曇って写生出来ず夕食を馳走になり 10h 帰館。3F 波止場 15,000 - 受取る。

後、三月一四日に「日記帳来る」と書かれており、この日に新たな日記帳が届いたと思われる。以上の理由により、昭和二七年の日記については、二月一六日以前の記載が欠落している。残念なのは、長崎で戦後はじめて開催された第二〇回独立展長崎巡回展（以降独立展と呼ぶ）の記録が欠落している点である。

一　野口彌太郎日記について

野口彌太郎の日記について、美術評論家の土方定一は『野口彌太郎画集』の中で以下の通り述べている。「野口彌太郎はパリ滞在記から歿年まで、小さなノートに細字で丹念に日記をつけており、（中略）毎日勤勉に制作し、またマティス、その他の展観を熱心に見てまわったことを書いている。ただ、残念なことに事実だけを正確に書いていて、小さなノートのためもあってそのときどきに見た展覧会などの感想が一切書かれていない[6]」この言葉通り、手帳は多少サイズが異なるが多くは縦一二．〇～十四．七cm×横六．七～九．五cm程度の小さなものである。なお、一部昭和三～四年（一九二八～二九）はB6、昭和四五～五〇年（一九七〇～七五）はA4程の大きさとなっている。見開きで一週間分書き込めるものがほとんどだが、見開きで四日、二日分のものもみられる。万年筆や鉛筆で書かれており、インクが薄くなっている部分、滲んで文字の判別が難しい部分もある。日記の内容は日々の記録が主だが、絵の販売や日用品購入の収支、関係者のアドレス、写生旅行地の関係連絡先、関わった展示会のメモなどが見られる。なお、長崎市野口彌太郎記念美術館所蔵分は一番古いもので昭和三年（一九二八）、新しいもので昭和五〇年（一九七五）となっている。また、この期間の日記が全て揃ってはおらず、欠落している年や無記年のものもみられる。筆者が長崎市長崎学研究所紀要『長崎学』第二号に掲載した「長崎に関する野口彌太郎の日記について」以降に新たに見つかった日記もあるため、既出論考とは数に変動がある点を留意されたい。当該史料の先行研究としては、長崎市野口彌太郎記念館美術館発行の『野口彌太郎研究資料　野口彌太郎の日記帳記載内容』があり、昭和九年（一九三四）から昭和一二年（一九三七）、昭和三一年（一九五六）から昭和三六年（一九六一）、昭和四八年の計一一冊が翻刻されている。

また、日記の他にもメモ帳、アドレス帳、野口の妻である野口菊枝の日記、野口や周辺画家に関する新聞記事のスクラップ、絵画制作時に参考にしたと思われる写真や切り抜きのスクラップブック、書籍類が長崎市野口彌太郎記念美術館に所蔵されている。

二　滞在中の展示会活動

（一）　第二十回独立展長崎巡回展

①　概要

独立展の開催期間については野口彌太郎日記が欠落しているため、ここでは独立展開催期間の野口の行動について長崎日日新聞、長崎民友新聞、美術雑誌等を用いて考察したい。

まず、野口がいつ長崎に到着したか検討する。妻の野口菊枝の日記に一月二九日「主人九州へ出発の筈、一h、吉岡、松島、山本、高畠氏五人同行[7]」とある。『時刻表復刻版（戦後編）』の昭和二五年十月発行の時刻表を見ると、午後一時に東京を出発する急行列車が

【表二】昭和二七年長崎滞在関連の新聞記事

通番	新聞	日付	見出し	掲載画家
1	日日	1月21日	第一回‘独立展’開く来月1日―10日・勝山小で	
2	日日（夕）	1月27日	秀逸約百点を出品 来月一日から長崎で初の独立展	
3	日日	1月29日	華やかに独立美術展開く 力作約百点を出品　来月から一日長崎市で	
4	日日	2月1日	今日から独立美術展 『長崎の春』など百点	
5	民友	2月1日	故永井博士と生前の約束 野口画伯‘長崎の離別’を市に寄贈	
6			独立展蓋開け　百余点の力作揃い勝山校で	
7	日日	2月2日	お蝶夫人の家	高畠達四郎
8	日日	2月2日	ファンどつと殺到 絢爛の独立美術展拓く	
9	日日（夕）	2月2日	今日から独立美術展　逸品百点を一堂に 野口画伯ら会員も来崎	
10	民友	2月2日	独立美術展開く野口、高畠画伯らも来崎	
11	日日	2月3日	長崎の丘に立ちて	松島正人
12	日日	2月4日	長崎の印象	山本正
13	日日（夕）	2月4日	朝の鼓動（16）絵の街ナガサキ	野口彌太郎
14	日日	2月5日	野口・高畠画伯ら大いに語る ―独立美術展、座談会―	
15	日日	2月5日	長崎の提灯	吉岡憲
16	日日	2月6日	長崎の街にて	野口彌太郎
17	日日	2月6日	絵になる長崎美人独立展 三画伯の熱望に応えて本社が主催モデルを募る	
18	日日	2月7日	大浦天主堂	末永胤生
19	日日	2月10日	長崎の丘	杢田たけを
20	日日	2月19日	生前の約束果たす―永井博士の昇天― 野口画伯、力作を長崎市に寄贈	
21	民友	2月19日	天なる聖者へ贈る 「長崎の離別」正式に市へ	
22	民友	2月23日	絵心から見た長崎 独立美術協会員囲む座談会	
23	日日（夕）	2月27日	私の名は「長崎美人」春の美術展に登場 野口画伯ら彩管を揮う	
24	日日	2月28日	長崎の美	野口彌太郎
25	日日	2月29日	夢の長崎	杢田たけを
26	日日	3月1日	お父さんから激励のお餅―長崎美人を描く野口画伯へ―	
27	日日	3月1日	長崎美人	吉岡憲
28	日日	3月2日	長崎の雨	山本正
29	日日	3月4日	美女の心	野口彌太郎
30	日日	3月5日	長崎の個性	山本正
31	日日	3月5日	野口画伯ら描く『長崎の女』―二カ月に亘る‘快心作’―	
32	日日	3月6日	発散する美	杢田たけを
33	日日	3月7日	美の神話	吉岡憲
34	日日	3月10日	長崎のかげ	野口彌太郎
35	日日	3月11日	散歩みち	吉岡憲
36	日日	3月12日	長崎点描	山本正
37	日日	3月13日	春	杢田たけを
38	日日	3月15日	長崎／アンデパンダン展	
39	民友	3月18日	パレット随想　長崎の建物	野口彌太郎
40	日日	3月22日	崎陽画壇に異彩放つ 浜屋で『独立五人洋画展』	
41	日日	3月22日	独立紙上洋画展①《肖像》《南山手風景》	吉岡憲
42	日日	3月23日	長崎美人に人気　似顔絵スケッチも好評 独立五人洋画展	
43	日日	3月23日	独立紙上洋画展②《三人》《顔》	吉岡憲
44	民友	3月23日	パレット随想 小さな人生	吉岡憲
45	日日	3月24日	独立紙上洋画展③《浦上の丘》《黒いショールの女》	野口彌太郎
46	日日	3月25日	独立紙上洋画展④《中国服の女》《H嬢像》	山本正
47	日日	3月26日	独立紙上洋画展（完）《教会（浦上）》《大浦風景》	杢田たけを 野口彌太郎
48	日日	3月26日	入場者一万を突破　五人展盛況裏に終る	
49	日日	4月1日	長崎美人を語る「独立美術」五画伯の女性観	
50	民友	4月1日	パレット随想　絵と文	山本正
51	佐世保時事	4月23日	家庭と文化　野口画伯らを囲んで	

※新聞略称：民友…長崎民友新聞、日日…長崎日日新聞、日日（夕）…長崎日日新聞夕刊、佐世保時事…佐世保時事新聞

あり、これが翌日午後五時五分到着となっているため、野口達は一月二九日に東京を出発、翌日三〇日には長崎に到着したと考えられる。[8]

次に独立展に関する新聞掲載を【表二】のとおりまとめた。一番早い記事は、『長崎日日新聞』一月二一日の記事（表二－一）で「第一回，独立展，開く来月一日―十日・勝山小で」と見出しがついており、記事には「独立展の創立二十周年記念展でもあり独立美術会員らの優秀作品百点が出品される」とある。開催期間については『夕刊長崎日日新聞』一月二七日（表二－二）に開催期間は二月一日から一〇日までとなっているが、『長崎市政展望　第十二号』には二月一日から五日までと記載され齟齬がある。[9] 開催期間の問題については、今後調査を進め別稿に記したい。

加えて、『長崎民友新聞』昭和二七年二月一日（表二－六）に「美術愛好家待望の長崎市、長崎市美術振興会主催「独立美術展」はいよいよ今日一日から長崎市勝山小学校講堂で幕をあける」と開催関係者の構成が書かれている。ここには書かれていないが、団体展なので独立美術協会も主催者であったと考えてよいだろう。

『長崎日日新聞』一月二九日（表二－三）によると「出品は諫早市出身の同会の巨匠野口彌太郎画伯の『裸婦』『F婦人像』を始め松島正人の『長崎の丘』などなじみなものから（中略）特に野口画伯の昨年五月浦上天主堂で筆をふるつた大作『永井博士の名誉市民葬』が出品されることになつている」と出品作品について触れられている。以上から、独立展の出品作品数が約一〇〇点、[10] 主催者が独立美術協会、長崎市、長崎市美術振興会、野口の出品作品が《裸婦》《F婦人像》記事と作品名が異なるが《長崎の離別―永井博士の昇天―》も出品されていたことがわかる。

あわせて長崎の洋画家で独立美術協会会員であった、末永胤生が独立美術協会創立二五周年記念の画集に寄せた文章を紹介したい。なお、末永は同年三月二一日～二四日の期間開催された長崎風物・長崎の女・独立五人洋画展「野口彌太郎・吉岡憲・杢田たけを・山本正・末永胤生」にも参加している。

【史料一】『二十五周年展画集附目録』昭和三一年

二六年、永井博士の葬式の頃、野口さんが来られて二〇周年展の長崎開催の案を出され、地元の諸谷さんの御骨折りで実現することに決まり、翌二七年三月始めて独立展が長崎で公開されたのである。幸い大変な好評を博した。その上、中央の大展覧会が長崎で開かれた第一号でもあつたのである。

長崎開催の場合は市教育委員会が名実共に主催なので、経費の点も事務の面も、一切責任もつて処理され、僕等は会と教育委員会との連絡係を勤めたり、運営上の助言を与えたり、開催中は作品の説明役に廻ったり、宣伝用の座談会やラジオ放送などの役を演ずるだけで済み、赤字に対する責任から解放されているということは、大変有難いことである。（中略）その後長崎には美術振興会といって、[11] 教育委員会の仕事を代行する機関が生れ、市の美術関係の諸行事を、企画し施行し、教育委員会と表裏一体になって活動を続けている。メムバーは全員画家で会長は諸谷さんである。

この史料から独立展長崎巡回展の開催経緯と当時の状況がうかがえる。なお、独立展開催時期について「翌二十七年三月」と末永はしているが、新聞資料等からこの点は末永の記憶違いと考える。

昭和二六年の野口彌太郎日記には、来崎中の野口が諸谷としばしば接触していたことが記録されている。[12]【史料一】とあわせて考えると、この時期独立展の長崎開催が決まったのだろう。また、独立展が長崎市教育委員会の主催事業であったことについても前述の『長崎民友新聞』昭和二七年二月一日の記事と同様の記載が【史料二】にみられる。

【史料一】には長崎市教育委員会と長崎市美術振興会が独立美術協会と共に、当該展示会に関して業務と経費を引き受けていたことが書かれており、独立展が長崎市教育委員会の文化事業の一環であったことがわかる。経費については、『長崎日日新聞』一月二七日に「本県では初の開催であるだけに市当局も五十七万円の予算で万全を期しており、入場料も一般四十円、学生二十円、小、中学生十円という破格料金で鑑賞させることになっている」とある。[13]長崎市が発行していた広報誌にも独立展に関するものが見られる。

【史料二】『長崎市政展望　第十二号』、「独立展長崎巡回展」、昭和二七年二月十日

市社会教育課では、市民の文化向上を目指し、とくに一流美術、芸術作品に接する機会は極めて少い市民一般に、いくらかでも寄与したいとの見地から、独立美術展を去る二月一日から五日まで勝山小学校で開催し好評裡に終了した。

なお、昭和二七年度予算審議に関する長崎市議会の議事録を調査したが、この時期は水道、学校、道路などの整備や国際文化都市計画に関する建造物の工事など、ハード事業が議事の中心となっており、独立展の話題は見受けられなかった。

長崎美術界を支え戦後、長崎市美術振興会、長崎県美術協会の発足に尽力した人物に後の長崎市長諸谷義武がいる。諸谷の業績、交友などをまとめた『諸谷義武伝』に同じく長崎美術界の再建に尽力し、一陽会会員であった大塚伊次の漫筆が掲載されている。これは二月二日、独立展のために来崎した画家たちを歓迎する宴席を描いたものである。『長崎市民美術展五〇年史』に阿野がこの絵の解説を書いている。

【史料三】長崎市民美術展五〇年史編纂委員会編『長崎市民美術展五〇年史』二〇〇一年、長崎市

独立展開催年の昭和二七年二月、大塚伊次は「絵日記」に「二月二日晩諸谷氏宅」と詞書して戯画風の墨絵を一枚ものにしている。独立展作家歓迎祝宴図である。上座に野口彌太郎・高畠達四郎・吉岡憲・松島正人・山本正、下座に諸谷義武、大塚伊次、松崎卯一、四海楼マダム、諸谷夫人ら一三人それぞれの特徴を巧みに描き分け長崎ルネサンス時代の気分を満喫できる漫筆として捨てがたい趣がある。

この絵には卓を囲み宴席を行う独立美術会員と長崎の美術関係者等が描かれ、人物画には名前とその時の様子を示す言葉が添えられている。中央画壇の画家と長崎の美術関係者の交友を示す作品として興味深い。

②　出品作品

独立展に約一〇〇点の作品が出品されたのは、前述のとおりである。その中で野口が出品した作品は《裸婦》《F夫人像》そして特

別出品の《長崎の離別―永井博士の昇天―》の三点であった。[14] 三作品とも『野口彌太郎画集』の年表に記載があり、制作年はいずれも昭和二六年である。この中でも《長崎の離別―永井博士の昇天―》は拙稿「長崎に関する野口彌太郎の日記について」[15]、及び「長崎に関する昭和二六年野口彌太郎日記について」[16]にて野口と永井隆の交友と永井の葬儀風景を描いた本作品の制作に至るまでについて野口彌太郎日記などを用いて考察した。今回は、野口と永井双方と交友があった出島町の産婦人科医久保田環の関係資料をもとに昭和二五年から始まった野口と永井の交流と昭和二七年開催の独立展での展示及び当該作品の長崎市への寄贈について検討する。

○《長崎の離別―永井博士の昇天―》（画像一）

まず、昭和二五年に野口が永井の寓居如己堂を訪れた点について、「野口彌太郎日記」昭和二五年一月一四日付によると野口は「杉山」という人物と共に浦上方面に出かけ、純心女学園、セント・フランシスコ病院、そして如己堂で永井と面会している。[17] 野口はスケッチを行い《永井博士像》二点が制作される。この日の様子を野口は昭和二六年一月十四日発行の『小説新潮第五巻第一一号』に書いている。[18]

今回、野口の親戚で長崎医科大学にて永井の先輩でもあった久保田宛に永井が送付した手紙を調査した。野口来訪について書かれていた部分があるので見ていきたい。

まず、野口と久保田の関係だが、久保田の妻美和子が野口と従妹の間柄で父親が早くに亡くなり野口家で育ったという。その後、出島町で久保田産婦人科を開業していた久保田の元に嫁いだことで久保田と野口に親戚関係が生まれた。なお、昭和一〇年（一九三五）の「野口彌太郎日記」【史料四】にも久保田の名前がみられる。

【史料四】「野口彌太郎日記」、昭和一〇年

4月11日（木）

11h長崎行のbusで-訪問。上野屋に投宿する。食後久保田宅を訪問　久保田君に市内を案内してもらふ　風景の変化大いによし　7h唐八景を見て茂木で夕食　小林君も同行。11h帰宅。

4月13日（土）

上野屋支払　30□　tip5 faoosn5　久保田宅11h発三人で唐津へ向ふ　3時で諫早：喜野：Takeo：を経る　唐津公園、名護屋城跡、真に雄大なり6h浜崎に□宿。久保田君の知人に歓迎される。

戦前野口を長崎で案内していたのが久保田であることが分かる。また、その後唐津に共に向かったようだ。

昭和三四年（一九五九）『長崎文化』第三号に昭和一七年（一九四二）太平洋戦争がはじまり、急遽上海航路で上海から長崎に戻った際の様子が書かれている。これにも久保田氏と野口の従妹である妻美和子が登場している。[19]

久保田は野口の親戚であったと同時に永井とは長崎医科大学で先輩後輩の仲であった。互いの自宅を行き来し、永井が放射線医学に進む後押しをしたという。このような関係性から、戦後、久保田が佐賀県唐津市に移住し、当地で産婦人科を開業して以降も手紙のやり取りをしていた。その中に野口の来訪に関する手紙が書かれている。

（画像１）野口彌太郎《長崎の離別―永井博士の昇天―》1951 年、長崎市永井隆記念館蔵

（画像２）野口彌太郎《永井博士像》1951 年、長崎市永井隆記念館蔵

（画像３）野口彌太郎《永井博士像》1951 年
久保田順一氏蔵

（画像４）永井博士の葬儀を描く野口彌太郎
1951 年、野口彌一氏蔵

【史料五】「久保田環宛永井隆手紙」昭和二五年三月一〇日

御手紙ありがとうございました　野口画伯と御縁がありますことを承り驚いたり喜んだりしました　画伯は御忙しい中を拙宅においで下さいましてほんとうに気持ちよい半日を過ごし二点の名画がうまれました　一点は先生の御手もとへ一点はありがたく私が頂きました　大そう美しい色調です　これをみると私の顔にも画趣があったことがわかりました　頂きましたのは如己堂の宝として後世に伝わるでしょう（後略）

この手紙の消印は「一九五〇年三月十日」となっており、野口来訪から約二か月が経過している。手紙の「二点の名画」は、来訪時に制作された《永井博士像》（画像二）（画像三）と思われ、永井と久保田の手許に一枚ずつ渡ったことがわかる。永井は昭和二六年五月一日に危篤となり、同日午後九時五〇分昇天した。[20] 訃報に接した長崎市は、二日田川市長以下関係者が参集、協議の結果名誉市民である永井の市公葬を執行することに決定する。[21]

野口はこの年、鹿児島、島原を経由し四月二八日に長崎市内に入った。永井と「来年も又肖像画をかく約束をしてお別れした」と書いているが、それを果たす前の訃報であった。[22] 昭和二六年五月十四日に永井の市公葬が行われ、野口はその様子を描きに浦上天主堂を訪れている。[23] この時、制作したものとして《長崎の離別―永井博士の昇天―》《パウロ永井博士のみまえに》がある。また、制作時の写真と思われる資料が野口の遺族宅から見つかった。浦上天主堂の仮鐘楼を背景に人に囲まれながら油彩画を描いている。（画像四）。仮鐘楼は昭和二一年に鉄骨造りとなっており、昭和二四年（一九四九）の聖フランシスコ・ザビエル渡来四〇〇年記念式典の際にも写真に写り込んでいる。[24] 野口の後ろには、黒い傘をさした男女がおり服装は喪服に見える。黒い傘は当該作品左手にも描かれており、写真に共通している。以上から永井博士の葬儀風景を描いている写真と比定したい。

《長崎の離別―永井博士の昇天―》は、昭和二六年の五月二二日～六月一三日まで東京都美術館にて開催された第五回美術団体連合展に出品、[25] 翌昭和二七年の独立展長崎巡回展にて展示された。[26]『長崎民友新聞』昭和二七年二月一日には、独立展開催と《長崎の離別》の出品について記事が書かれている。「これが同美術展に出品された「長崎の離別」で昨年の連合展に出品されたときから長崎市では「譲ってくれ」と熱望していたが、今回特別出品後博士の冥福を祈る画伯の好意から長崎市に無償でゆずられることになったもの。」とある。[27] 昭和二七年二月一八日市長室にて《長崎の離別―永井博士の昇天―》が寄贈された。『長崎日日新聞』二月一九日（表二－二〇）には「生前約束果たす，永井博士の昇天．」、[28]『長崎民友新聞』（表二－二一）「天なる聖者へ贈る「長崎の離別」正式に市へ」[29]などと新聞に記事が掲載された。このことについて、田川市長は『長崎日日新聞』に「永井図書館建設後は永井博士の記念として同館にかかげたい、独立展開催についても長崎文化の向上にため全面的な応援をしてもらい感謝に堪えない。」と寄贈及び独立展開催について謝意を述べた。[30]

③　座談会

独立展開催に伴い、二月一日午後三時から会場にて長崎市美術振興会主催の「独立展、座談会」が開催された。この様子は、昭和二七年二月四日の『長崎日日新聞』に掲載されており、野口、高畠

達四郎、松島正人、山本正、吉岡憲ら独立美術会員と長崎洋画クラブ、佐世保洋画クラブ両会員らが出席したと書かれている。[31] 司会は、長崎の洋画家で長崎洋画クラブ会員、後の長崎市美術振興会副会長となった山田正孝がつとめた。[32] 司会からの質問として①独立美術協会の主張や歴史、②長崎会場の感想、③絵を描く人の参考になる一言、④何故絵を描くのか（会場からの質問）、⑤長崎の冬の風景について、⑥絵の鑑賞の仕方で、これらに答える形となっている。この中で、独立展長崎巡回展の会場の様子について松島が述べた「同人の作品がほとんど一点だけしか並べられてないのは、その作品の方向性を知るのに不便で残念だが、それを除けば地方の会場としては非常に良かったですよ」という発言については、展示状況を知るうえで興味深い。[33]

また、長崎の冬の風景に関する質問では、高畠と松島、野口が次の通り長崎の魅力について回答している。

【史料六】『長崎日日新聞』昭和二七年二月四日（表二－一四）

松島「長崎の町は周囲の山が少し歩くと形がすぐ変り、高低も多く、港もあって非常にモチーフが多い、建物も古くそれがとりどりの色のハーモニーをかもしだしている」

野口「確かに変化が多いね、それに人間がノンビリしている（笑声）街と人とのフンイキが画をかくのに実に都合がいゝ、東京はセカセカ速足で歩いていて、いつ突飛ばされるかわからない（笑声）長崎駅におりるとホッとしてトタンに僕もノンビリする、国際的な感じもいゝが、僕はやはり長崎のノンビリさがいゝ」

このように、松島は画家が長崎に惹かれる長崎の魅力について話をしている。昭和二三年から長崎を訪れるようになった一陽会の画家鈴木信太郎も松島同様に長崎の高低と洋館を取り上げ長崎の魅力を述べている。[34]

また、【史料六】の野口の言葉については、昭和二四年発行の『アトリエ』No.二六六に似た心情が書かれている。

【史料七】『アトリエ』No.二六六、昭和二四年

今の東京のあわただしさは、世の中のすべての秩序が出来上る前の雑音のなかにいるからであろう。都会的な風物を描きたい気持ちはあっても今のところ眞の都会的な眞相はなかなか望みがたい。眞の都会的の良さは、もっと整理された静かな一隅があるべきだ。

野口が都会ではなく長崎に魅力を感じていた理由が【史料七】からも推察される。長崎の洋画家池野清は野口を「エトランゼ」と称した。野口の作風について「言って見ればエトランゼ特有の哀感と情緒がその中にそれ相当の人生の重さを込めていかにも透明そのものに把えてある。[35]」と述べ、野口の作風に旅人的な視点があると書いている。東京の慌ただしさに魅力を感じず、地方、特に長崎ののんびりした雰囲気を野口が好み描いたことが池野の言う旅人的な作風に繋がったとも考えられる。反面、野口の作風を都会的と評価し、地方都市を描くことに否定的な見解を述べた美術評論家もいた。[36]

この年、野口は長崎の景観の変化についても独立美術協会画家たちが新聞にて連載した記事の中で触れている。

【史料八】「長崎の街にて」野口彌太郎『長崎日日新聞』昭和二七年

二月六日（表二－一六）

今日の気持ちからいえば、長崎の道路はたしかに古くさくて歩きにくい。自動車は不思議な勾配の坂を登ったり、道路いっぱいな道を走ることゝなる。しかしこゝに近代的な道路をつくるとなれば、わが尊重する長崎のフンイキは、随分こわされるだろう。

また、末永胤生も野口の記事の翌日、次の通り書いている。

【史料九】「大浦天主堂」末永胤生『長崎日日新聞』昭和二七年二月七日（表二－一八）

観光長崎に大きな夢と期待をもって訪れる人々で「道路が悪い、町が汚くて、期待ほどでもなかった」などの声があるようだが、歴史が古くかつ起伏の込み入った地形の上に出来上がった町なのだから、平地に区画整然とペンキ塗りの明るい建物の立ち並んだ近代都市を頭に置いて考えられると、だいぶん勝手が違うと思う。長崎のよさは歴史の上に立っており、懐古の上に立っているのであって、一枚の石畳に過去の足音を聞き、風雨に幾星霜をさらして来た灰色の壁に古い営みが見られて画家としては何よりこの町が魅力なのである。

両記事は独立展開催頃の連載で、長崎の景観変化や都市計画、観光利用について言及したものでは早い時期のものと考えられる。戦後長崎市が進めた都市計画による景観の変化は、絵画のモチーフを長崎に求めていた画家たちにとって受け入れがたかったことが分かる。末永は前述の通り、当時長崎に在住しており長崎の画家からも問題意識が生まれていたようだ。

同年八月一八日付『長崎日日新聞』にて独立美術協会の画家たちが連載した「パレット随想」の中でも野口は長崎の都市計画を懸念する記事を書いている。

【史料一〇】『長崎日日新聞』昭和二七年八月一八日

復興の街並みにのつた建築がこゝへ来る度に急にふえたのに気付く。大長崎としては少し貧弱かもしれぬが、長崎駅の建物は成功していると思う。（中略）広げられた駅前の広場の正面につづいた商店の建物は、まつたくまちまちで安手でがつかりしてしまう。なぜ長崎らしい印象を与えるように出来なかつただろうか。（中略）長崎では特に周囲の環境を十分に尊重してもらいたいことだ。これは長崎の建物に一番必要条件だと思う。机上プランか企画によるのかその土地の環境を一向お構いなしに、実につまらぬ大きな学校の建物が、いろいろの場所にふえてきた事は実に、悲しいことだ。長崎の都市美を愛する建築家の出現がのぞましいのだ。

野口は戦後の復興計画により新たに建設される建物や道路などについて、周辺景観との調和を求めている。これは、絵になる長崎独特の景観が他都市と変わらない無個性な町になることを危惧していたと考える。また、【史料七】の「世の中のすべての秩序が出来上る前の雑音のなかにいるからであろう。」という東京の状況に長崎が近づいていると感じたのではないだろうか。

昭和二七年以降、野口及び長崎を訪れた画家たちは度々長崎の景観変化について言及するようになる。景観の変化とその要因である

戦後の長崎国際文化都市建設法、それに連動するような画家たちの評価については別稿で論じたいと考える。

④　小括

野口は昭和二一年から長崎を訪れる中で、長崎人と交友を持つようになる。【史料一】に末永が記した通り、独立展は野口が長崎側に提案し、当時長崎市議であった諸谷の協力のもと地方自治体そして地元の美術団体が主催者に入る文化事業として開催される。独立展は戦後長崎で初の団体展であるとともに、復興途上の長崎で中央の芸術に触れる格好の機会となった。この時の座談会を見ると、画家たちが長崎の何に惹かれ長崎を描くのか、長崎の他都市とは異なる景観が魅力であったことがわかる。また、独立展、座談会を通して、野口ら中央画壇の画家と長崎画壇の画家たちが交友したことで長崎側は制作や美術の見方など学ぶことも多かったと考える。

独立展に伴って行われた座談会では、野口が東京と長崎を比較している点、長崎の景観が絵になるというだけでなく、街と人の雰囲気にも魅力があると述べている点について、野口が長崎を画題とした理由が分かり興味深い。また、戦後の復興計画による景観変化により、長崎の街の雰囲気が変わりつつあり、画家たちから声が上がりだしたのもこの年であった。

独立展に野口は三点の作品を出品したが、そのうちの一作品である《長崎の離別―永井博士の昇天―》は、目玉となる作品であった。当該作品の誕生と独立展への出品、寄贈までの一連の過程は野口と永井の最晩年の交友を示すものである。当該作品は戦後長崎を描いた野口の代表的作品であり長崎での活動を知る上で意義深い。

（二）長崎風物・長崎の女・独立五人洋画展「野口彌太郎・吉岡憲・杢田たけを・山本正・末永種生」の開催

①　概要

三月二一日～二四日、長崎風物・長崎の女・独立五人洋画展「野口彌太郎・吉岡憲・杢田たけを・山本正・末永種生」が開催された（以下、独立五人洋画展とする）。独立五人洋画展は、野口及び独立美術協会の後輩にあたる、同会の吉岡憲、山本正、杢田たけを、末永胤生が参加した。この展示会は長崎日日新聞社・長崎市・長崎市美術振興会と協力して行われた長崎の美人を野口達画家が描き、中央の公募展に出品する一連の企画と連動していた。【表一】二月二一日の日記に「長崎美人しんさ会」など関連の記述がみられる。ここでは、長崎美人を描く企画及び絵画制作、展示会について野口彌太郎日記と当時の新聞などを元に考察する。

②「長崎美人」に関する企画

『長崎日日新聞』昭和二七年二月六日（表二－一七）に「絵になる長崎美人　独立展三画伯の熱望に応えて　本社が主催モデルを募る」という募集記事が掲載された[37]。記事によると長崎日日新聞社、長崎市、長崎市美術振興協会がタイアップした企画であった[38]。

「野口彌太郎日記」二月二一日に「長崎美人しんさ会」との記載がある。この内容は、『長崎日日新聞』二月二七日に長崎美人を選ぶ選考会が精洋亭にて二月二一日に行われた記事と合致する。

【史料一二】『長崎日日新聞』昭和二七年二月二七日（表二－二三）

野口、吉岡、山本、杢田画伯、鈴木市助役、本社から吉田文化

部員、小沢長大講師らが審査の結果オランダ系、中国系など長崎独特のエキゾチックな個性美がえらばれて結局五名が審査員の眼にとまり、二十五日から各画伯がそれぞれ製作を開始した。完成は三月一日の予定であるが

なお、作品完成予定日とされた、『長崎日日新聞』三月一日（表二－二六）の新聞には「御父さんから激励のお餅　長崎美人描く野口画伯へ」[39]と長崎美人を描く野口に諫早に隠棲している父彌三から二八日差し入れがあったことが記事になっており、製作状況については触れられていない。

三月三日の野口彌太郎日記において、「浜屋会場決定」と書かれていることから、この日に展示会の会場が決定したようだ。新聞に会場決定の情報が出たのは、『長崎日日新聞』三月五日で「野口画伯らが描く「長崎の女」二カ月に亘る快心作二一日から四日間浜屋デパートで作品発表」と見出しがついている。

【史料一二】『長崎日日新聞』昭和二七年三月五日（表二－三一）

同展には二カ月にわたり四画伯が彩管を揮ったオランダ系、中国系など長崎独特のエキゾチックな個性美あふれる長崎美人五名の絵が飾られるほか浦上地区一帯の風景、医大の煙突、大浦天主堂、港の長崎など九〇点近くが市民にお目見得する。

【史料一二】に書かれたように、独立五人洋画展の展示作品が滞在中の新作及び長崎美人を描く企画に関するものであったことがわかる。

『長崎日日新聞』三月一五日には「長崎／アンデパンダン展」とある。

【史料一三】『長崎日日新聞』昭和二七年三月一五日（表二－三八）

詩の街長崎のおもかげをカンバスに求めて二カ月。丘や石畳の坂に立って劇しい画筆を揮ってきた野口彌太郎、吉岡憲、山本正、杢田たけをの四画伯は長崎でものした絵をアンデパンダン展に出品。さらに来月幕開く国際美術展への出品作の完成を急いでいるが（後略）

この年、日本美術会主催の第五回日本アンデパンダン展が二月三日から一四日まで、読売新聞主催の第四回日本アンデパンダン展が二月二八日から三月一八日まで開催されており、野口は両展示会に出品している。だが、『野口彌太郎画集』にはこの滞在時期の作品が出品されたという記載はない。なお、記事にある第一回国際美術展は五月二二日から六月一三日まで東京都美術館で開催されており、これには《みどり嬢》《黒ショールの女》《家と山》が出品された。[40]記事のとおりアンデパンダン展に出品されたかは不明だが、前述の二月六日の記事にあるとおり、長崎美人の絵画を中央の展示会に出品するという企画の目的は第一回国際美術展出品で果たされたようだ。

三月二一日の展示会開催にあたり、前日の三月二〇日の「野口彌太郎日記」には「作品を会場へおくる。4・30－5h会場飾りつけ」とある、また翌二一日に「3月21（金）（独立五人展）快晴　9h かき30F、10Fを会場へはこぶ」と書かれている。なお翌二二日には「会場へ作品ベルニーとゞけ」とあり、作品を追加したようだ。また、「似顔をいろいろ」とも書かれており、これは同日開催された、長崎日日新聞社が募集した市民の似顔絵を画家たちが描くイベント

を指していると考えられる。

新聞にも三月二一日から独立五人洋画展が浜屋デパートで開催されたと『長崎日日新聞』三月二二日の（表二－四〇）に伝えられている[41]。なお、三月五日の『長崎日日新聞』（表二－三一）の記事には四人展となっていたが[42]、長崎市在住の末永胤生が参加し独立五人洋画展となったようだ。似顔絵のイベントについても、二三日の新聞（表二－四二）に盛況な様子が記事になっている[43]。

野口彌太郎日記三月二三日には「1h kankoHotel・3h長崎女性との会談」とある。『長崎日日新聞』昭和二七年四月一日（表二－四九）の記事にも「長崎美人を語る「独立美術」五画伯の女性観」と三月二三日に長崎観光ホテルでモデルを労う懇親会が開催されたことが伝えられている[44]。この記事には、今回の企画で選ばれたモデルが紹介されている。名前は「相浦弘子、高松吉子、太田京子、永田照子」の四人。二月二七日の新聞記事では五人が選出されたと書かれており、人数の異同が見られる。

野口はこの企画において、『野口彌太郎画集』に掲載されている《みどり嬢》（図五）を制作している。《みどり嬢》制作については「野口彌太郎日記」二月二三日に「11h瀧口ミドリ女肖像8F2枚」、二月二四日「ミドリ女加筆」と記載がある。《みどり嬢》は二〇号の作品で日記に書かれたキャンバスサイズとは異なるが、長崎の女性を描く企画中に描かれた点とモデルと作品名が共通する点において「瀧口ミドリ」という人物が《みどり嬢》のモデルであると考えたい。また、野口は実名を出していないが、《みどり嬢》について懇親会の記事の中で次のように述べている。

【史料一四】『長崎日日新聞』昭和二七年四月一日

本社　野口先生のM嬢は美しい絵になりましたね。

野口　Mさんは美しさが余りに都会的すぎるがそれでもやはり長崎の生活がぴったり受け止められている。永く長崎にいると美しさが沁みてくるのですね。

選出された四人のモデルにMのイニシャルの人物はいないため、この記事は「瀧口ミドリ」の話題と比定したい。《みどり嬢》は同じくこの企画で制作された《黒ショールの女》と共に第一回日本国際美術展の出品作となっている。『野口彌太郎画集』にも掲載されており[45]、現在は長崎市野口彌太郎記念館の収蔵作品となっている。

独立五人洋画展は盛況のため二五日まで一日会期を延長し、最終的に五日間で一万人が入場した[46]。

③　出品作品

独立五人洋画展の出品作品は《黒ショールの女》《大浦風景》《長崎の四人の美女》《大浦風景》《浦上の丘》《南山手》《長崎の町》《大浦の眺》《港》の九点[47]。作品は【史料一二】のとおり、昭和二七年の滞在中描かれた風景作品と長崎の女性を描いたものであった。

野口が長崎の女性についてどのように考えていたのか、同時期に書かれた文章を見ていきたい。

【史料一五】『長崎日日新聞』昭和二七年三月四日（表二－二九）

長崎の美女を画枠の前にすえて描いている。ここはどこであろう。どこの国か、すこしわからなくなる。何か変ったしかし自由な組立てが感じられる。これは外見から私の目にうつるこの美女の魅力である。小麦色よりもう一息黄味とややすこしの黒

色をまじえた皮膚、ギリシャのヴィナスの東洋への旅路をここに発見するのではなかろうか。
私はここの土地の色彩から、その形につづき、すでに多くの発見をしたはずだ。それさえもまだまだつかみ得ない。
だが、それよりも私自身この美女の心、その自由な、自然さ、その本然の自由な気質こそ、私の一番書かねばならぬところだと思う。

【史料一六】『独立五人展』小冊子、昭和二七年三月
だいぶ前からひそかに長崎的美女の発見を心のそこにいだいていたようだ。長崎の風景と同様に長崎の人たちのその人間性こそ、ここの風景と同様に、現代の日本では最も国際的な自由さを昔からもっていると思うのである。

【史料一七】『長崎日日新聞』昭和二七年四月一日（表二－四九）
要するに長崎女性の美しさは顔かたちより内面にひそんでいる性格にあるようです、しかし余りねらいが深すぎて絵にも相当苦しいことが多かった、現在まで感じたことは自然さがある、この自然さが町を歩く人、花売り娘にも見られる。

この他『長崎日日新聞』二月二八日でも野口は長崎の美について、江戸時代に長崎が西洋及び中国に開かれていた貿易港だったことにより、異国情緒が土地に溶け込んでいることを挙げている[48]。【史料一五】【史料一六】共に長崎の風景とあわせて長崎の女性にもこの異国情緒が沁み込んだ魅力があると考えていたことがわかる。
【史料一七】に書かれた長崎女性の美しさは内面にひそんでいるという点については、「長崎を愛す」と題した文章に「あの人なつこい、未知の事物に対する熱い心、これこそ昔の貿易港当時からの精神であって、これが世界に通じる一番強い長崎のフンイキなのである[49]。」と長崎人の魅力を語っている点と併せて考えたい。野口の言う長崎の美点と長崎女性の美しさはイコールであり、国際性、自由さ、のんびりとしたさまが他都市と違う長崎（長崎の女性）の個性と考えたようだ。
以上の野口の長崎の女性美に関する考えを前提とし、独立五人洋画展に出品された作品二点を紹介する。

○《黒ショールの女》
《黒ショールの女》は、独立五人洋画展に出品、長崎日日新聞紙上で三月二二日から二六日まで連載された「獨立紙上洋畫展」に掲載されている。また、独立五人洋画展のパンフレットでもこの作品に触れている。

【史料一八】『長崎日日新聞』昭和二七年三月二四日（表二－四五）
長崎的美女というよりもつと都会的な洗練さをもつているかもしれない。静かなやわらかい魅力である。大きな眼が人形のような可愛いゝ印象を与える。

【史料一九】「独立五人展」小冊子、昭和二七年三月
「黒ショールの女」は知性的で充分都会的な新鮮さを身に着けた人形のように美しい女性である。私はそのような感じを出したいところから、或ひは人形的な美しさにやや偏り過ぎたかもしれない。

（画像５）
野口彌太郎《みどり嬢》1952
長崎市野口彌太郎記念美術館蔵

（画像６）野口彌太郎《長崎の四人の美女》1952
長崎市野口彌太郎記念美術館蔵

（画像７）野口彌太郎《長崎の四人の美女》1952
長崎市野口彌太郎記念美術館蔵

当該作品は、『野口彌太郎画集』には八号Ｆの作品が二点掲載されている。また、そのうち一枚が《みどり嬢》と共に第一回日本国際美術展に出品された。【史料一八】【史料一九】のとおり眼と顔の丸みが人形的な印象を与える女性像で和装に黒と大判柄のショールを纏っている。同年代に描かれた《Ｆ婦人像》や《みどり嬢》と比べても幼い印象を受ける。

○《長崎の四人の美女》墨彩・昭和二七年（画像六）

○《長崎の四人の美女》水彩・昭和二七年（画像七）

長崎美人を描く企画の折に制作された作品。『長崎日日新聞』昭和二七年二月二八日（表二-二四）に《長崎の四人の美女》（画像六）と野口の「長崎の美」と題した文章が掲載されているがここで、作品については触れていない。

また、独立五人洋画展のパンフレットに次のように紹介されている。

【史料二〇】「独立五人展」小冊子、昭和二七年三月

「長崎の四人の美女」は「黒いショールの女」と比較すると、もっと自分自身の表現したい赤裸々の長崎の女性を表現したい気持を強調したつもりだが、まだまだ完成のところにゆかづ、今のところ中途半端なところになってしまったようだ。四人の群像の組合せも、もっと自然にあるべきかと思う。今のところ半成の作品である。

《長崎の四人の美女》は現在長崎市野口彌太郎記念美術館に墨絵と水彩二点の作品が収蔵されているが、独立五人洋画展に展示された作品がどちらであったかは判然としない。

④ 小括

独立五人洋画展は長崎日日新聞社、長崎市、長崎市美術振興会など長崎の官民団体が野口たち画家と協力して開催された。また、長崎美人を画家たちが描き中央の展示会に発表、長崎をアピールする企画も同時に行われた。これは野口たち画家の女性を描こうという創作意欲と長崎を中央にアピールしたい長崎側の思惑が一致したもので、結果第一回国際美術展などへの出品が実現し、展示会及び企画の目的は達成された。ここから、画家たちと長崎側との協働体制が出来上がっていることが分かる。

（三）昭和二七年のその他の展示会について

① 「野口彌太郎、吉岡憲、山本正」独立三人洋画展

「野口彌太郎日記」によると、三月二七日に「諫早へ作品おくり」と書かれており、これは『野口彌太郎画集』にある三月二八日から三〇日まで、諫早の十八銀行諫早支店にて開催された「野口彌太郎、吉岡憲、山本正」独立三人洋画展へ作品を送ったものと思われる[50]。翌二八日に展示会が始まったが、野口はこの日四時三〇分頃まで大浦で二五Fの作品を制作しており、諫早に到着したのは夜の八時四四分であった。三月二八日の日記には「諫早。山本君から電話」と書かれており、同展示を共同で開催していた山本正からの連絡と比定する。彼は既に諫早の展示会に居り、野口は会場を任せていたと考えたい。昭和二六年五月一九日、二〇日に開催された三人展「松島正人、林田重正、野口彌太郎」でも野口は開催期間中の五月二〇日に東京に向けて帰路につき、二一日に東京に到着、同日室町画廊で開催された「野口彌太郎個展」に足を運び、翌日には第五回美術団体連合展に作品を届けている[51]。この前例からも、必ずしも野口が会場に居なくとも展示会を開催できるよう、若年の画家や土地の人間の協力があったと推測できる。

翌二九日は、作品箱が開かれ盗難被害があったようだ。「6h前警察所へ行く。作品箱が開かれていた。10hトウナンを見はる。（中略）山本の時計、私のヅボンと金10,000・サイフとも」と被害が書かれている。このことについて、長崎新聞昭和五〇年七月八日に長崎での活動を振り返った記事に次のように書いている。

【史料二二】『長崎新聞』昭和五〇年七月八日

ある年講習会の前夜、諫早の旅館で盗難に遇い、衣桁のジャンバーなどには手をつけずに、絵具箱の蓋を開いて絵具ばかりに驚いたのであろうか、ズボンだけ持っていった。幸い安勝寺の住職・正林先生のズボンを拝借して講習会を終えることができた。

日記に講習会の記述は見られないが、盗難が起こりズボンを盗られた点は昭和五〇年に描かれた記事と共通している。同日、諫早の関係者と懇親会が行われたようで、その際謝礼金を受け取ったことが書かれており、これが講習会の謝礼だったとも考えられる。また、盗難の件で、翌三〇日には警察が会場を見回ったようだ。

この日、前述の安勝寺の正林と共に鰻屋を訪れている。正林家は

諫早・安勝寺で代々住職を担う家柄で、昭和三三年（一九五八）諫早大水害後に諫早市の依頼で野口が移設前の眼鏡橋を描いた際に、この安勝寺を制作場所に選んでいる。その後、諫早での展示は終了、夜七時頃には長崎行の急行バスに乗り、到着後四海楼[52]へ向かった。

なお、当該展示会について、長崎日日、長崎民友両新聞に記事は見当たらない。

『野口彌太郎画集』によると、同展示会には《浦上風景》《長崎の眺め》《銀座通》《夕ぐれの町》《丘の眺め》《南山手》《漁村の春》の七点が出品された[53]。独立五人展洋画展にも出品された作品が四点含まれており、滞在期間中の新作を諫早でも展示したようだ。

② 展示会

この展示会は、新聞、資料などほとんど記録が無く名称、会場など詳細不明である。

展示会については野口彌太郎日記の記述が重要な資料となっている。日記を見ると四月十七日から十八日の二日間に「展示会」と記載がある。四月十七日「展示会一日目、会場へおそく出る。」、十八日「展示会二日目」には「会場」という文字がありどちらも展示会関連のものと思われる。また、十七日に「芝野氏に招待され諸谷、楢村君等とベッコウ屋によりカフェーによりだいぶよふ」とある。野口と共に招待された二人は長崎の美術関係者で当時長崎市議会議員であった諸谷義武と画材屋光風堂の楢村正直である。このように、長崎市内の人間と行動していることからも、当該展示会は長崎市内で行われたものと判断したい。

十八日には「展示会二日目」とある。「会場」という文字が展示会関連のものと思われる。また、「長崎競輪の絵を用意」とあるが、この作品は『野口彌太郎画集』掲載の《長崎競輪》と比定される。『夕刊長崎日日新聞』に長崎ゆかりの著名人を取り上げた「朝の鼓動」という連載記事があり、二月四日に野口が掲載されている（表二-十三）。その末尾に「長髪に油をつけて櫛をあてた野口画伯は、ぶらり長崎競輪へでかけた。」とあり[54]、二月四日頃には《長崎競輪》が制作されていたと考えられる。その後、三月二十二日の日記に「ケイリンの□を仕上る。」とあり、前後の状況からこの日《長崎競輪》が完成したと判断したい。四月十四日の日記には「11h諸谷氏と市役所訪問。ケイリンの作品のこと。」とあり、当時市議会議員であった諸谷と長崎市役所を訪れこの作品の話があったようだ。当該作品は『野口彌太郎画集』によると、長崎市公会堂蔵となっており、長崎市に寄贈されたことがわかる。昭和四二年長崎競輪場が廃止され、現在では当時の様子を知ることのできる貴重な作品である。

③ 独立美術小品展示会（佐世保）

佐世保で開催された独立美術小品展示会については、『野口彌太郎画集』に記録がないため、「野口彌太郎日記」といくつかの資料をもとに考察してみたい。日記によると、野口は四月二〇日に佐世保に到着している。この佐世保滞在について、野口は『長崎新聞』昭和五〇年七月八日の記事に当時を振り返って以下のとおり述べている。

【史料二二】『長崎新聞』昭和五〇年七月八日

親和銀行の北村徳太郎会長などの世話で、佐世保で山本正君と二人の展示会を開いた。玉屋の田中丸善三郎氏の住まい、佐世保港を俯瞰する庭でスケッチをした。教会が画面の左手に治ま

るよい構図である。

この史料から、独立美術小品展示会が野口と山本の二人展であったと推察される。展示会の開催場所、出品作品等詳細は不明である。

あわせて、この時期の日記を見ると、二一日「山本君北村氏を訪問」とある。この北村氏は【史料二二】にある当時親和銀行取締役会長であった北村徳太郎と思われる。北村は親和銀行の前身佐世保商業銀行頭取、昭和一四年（一九三九）佐世保銀行と合併親和銀行が発足すると副頭取に、昭和一八年（一九四三）に頭取となる。昭和二一年戦後初の衆議院選に当選し片山内閣の運輸大臣、芦田内閣の大蔵大臣などを務めた人物である。[55] 美術界とも交流があり、野口と同じく長崎を描いた鈴木信太郎が長崎の郷土史家渡辺庫輔に宛てた昭和二九年の書簡にも「実は、先日佐世保の親和銀行東京支店でたのまれて来年のポスターをかく事になり北村徳太郎氏に会ったら一度来ませんかといふ事で長崎へ行くつもりであったのがのびのびになっていたところで…」と、名前が出てくる。[56]

また、二三日の日記には「中食は田中丸氏も一緒。会場へもどる」とあり、【史料二二】に名前がある玉屋の田中丸善三郎とこの日昼食をとったようだ。田中丸は父田中丸善蔵が創業した百貨店の一つ佐世保玉屋に勤めていた。当時の役職は不明だが、昭和三三年専務取締役、昭和三六年六代社長となった人物である。[57] 昭和二四年に野口が佐世保を訪れた際にも田中丸家に行ったことが日記に書かれており、この頃既に交友があった。[58] なお、長崎市内滞在中の三月三日の日記に「ひる田中丸、堀氏四海楼にありのむ」とあり、この日は長崎にて田中丸と接触していたようだ。独立美術小品展示会の話をしたとも考えられる。

【史料二二】については、異なる年の出来事が混同しているため内容を整理すると前半の独立美術小品展示会開催については昭和二七年、後半の「玉屋の田中丸善三郎氏の住まい、佐世保港を俯瞰する庭でスケッチをした。」は昭和二四年の事と比定する。[59]

続いて、関連して行われた「佐世保時事新聞座談会」についても触れておきたい。四月二一日の日記に「四・五ｈ時事新聞ザダン会」とある。これは、佐世保時事新聞と野口と山本正、林田重正による座談会で、四月二三日にこの様子が佐世保時事新聞紙面に掲載された。（表二-五一）なお、林田重正は野口と同じく諫早出身で遠縁にあたり、前年に野口、松島正人と三人展を長崎浜屋で開催、その後佐世保に滞在していた。[60] 座談会の場所は、佐世保市谷郷町の菊谷旅館であった。

座談会の内容を紹介したい。野口は昭和二四年に佐世保を訪れた時のことについて「この前来たとき、二枚、三枚描きましたがね、駅前から教会を入れて港を描いたし、旅館から港が見えたので、それや谷郷町から描いたこともある」、また鵜渡越はどうかという記者に対し「天気のよい時は画になりますね、この前来た時登ったンだが翌る日が雨で駄目だった（中略）むしろ登る途中がいゝですね、造船所など」[61]と述べている。この言葉について昭和二四年の日記の該当箇所から見ていきたい。

【史料二三】

1月11日（火）（佐世保）晴

いさばりに光を見　田中丸家の社で30Ｐをかく 逆光で眼がいたくなる 新聞社寫眞をとる。

1月14日（金）佐世保（洋画展）雨

終ってudogoeを見に今里氏の車で登る。九十九島を見る。今里家にて堀君等をまじえて馳走になり泊す。（今里家）
1月20日（木）　晴、あたたかし
30Pを教会の上の畑でかき一枚。失敗してかきなおす5－6h
1月23日（日）（長崎－佐世保）　曇－雨
2h発佐世保へ向ふ一太郎諌早で下車。30Pを教会の上畑でかく。一度失敗して全部ふきけして再び描く5－6h白雲□里荘で宴会　今里、堀、大いによって早くねる。11時過ぎ

野口が鵜渡越を訪れたのは昭和二四年一月一四日であった。【史料二三】によるとこの日は雨で、昭和二七年座談会の言葉とも合致する。この時鵜渡越に野口を案内した今里は、当時親和銀行の常務取締役だった人物で、野口の佐世保滞在時の日記に度々名前が出てくる。[62]また、日記のアドレス帳部分にも昭和二五年から三〇年まで氏名、住所、電話番号が書かれている。今里は北村、田中丸と共に野口の佐世保滞在を助けた人物であった。

また、座談会での「駅前から教会を入れて港を描いたし」という部分は、【史料二三】一月二〇日、二三日の日記と繋がる。【史料二二】の田中丸の住まいでスケッチしたという記述もこの日の事だろう。この絵は、作品サイズおよび年代から《逆光の港（佐世保）》としたい。当該作品について、制作の時のことをこう述べている。

【史料二四】『婦人之友』第四三巻第八號、婦人之友社、昭和二四年

この時銀色の雲間を破って夕陽の太陽が山の上に、燦々と照りだして来た。海面は油のようにキラキラ輝きだした。…前景に近く港につゞく驛の港内が見え貨物が高く積まれている。長くつゞいた敷條のレールには貨車の列がつゞいている。貨車を引いた機関車が現われ左手になお近く壮大な教会堂のまっ黒な影の中に消えていく。

また、佐世保と長崎の色彩の違いに関しても座談会で話題に上がり、佐世保について「ドギツイのですね、豊かとは言えないように思うな」と野口は述べている。これに対し、林田が「本当の色彩の豊かさというものはやはり長崎にあると思いますね、渋さがある」と答えた。[63]その流れで、記者が服装に関して長崎と比較、特殊婦人について尋ねている。この質問に対し、野口は特殊婦人を取材し画題に取り上げたいと述べている。この野口の意欲が結実したのが昭和二九年に描かれた《佐世保国際通り》《街角の女たち》などの作品である。《国際通り》は、戦後佐世保の国際通りの夜の情景を描いたもので、街のネオンと複数人のアメリカ人水兵、日本女性が描きこまれている。長崎の街を描いた作品とは異なるきらびやかで都市的な情景の作品と言える。

④　小括

「野口彌太郎、吉岡憲、山本正」独立三人洋画展、長崎での展示会、独立美術小品展示会については、不明な点も多く全体像を考察することは出来なかった。しかしながら、諌早、長崎、佐世保で野口の制作活動が複数の協力者を得て行われていたことがわかった。

また、『佐世保時事新聞』での座談会では、佐世保と長崎の街の比較がなされ、長崎に色彩の豊かさがあるという画家たちの発言が興味深い。野口が初めて佐世保を訪れた際に描いた《逆光の港》について、座談会と昭和二四年の史料を基に制作状況を考察した。

おわりに

昭和二七年一月三一日から四月二九日までの野口の長崎滞在時の独立展長崎巡回展、長崎県内各地で行われた展示会、制作された作品、土地の人々との交友を「野口彌太郎日記」と当時の新聞、美術雑誌などをもとに明らかにした。昭和二七年の長崎滞在の特徴を以下のとおりまとめたい。

① 昭和二七年の長崎滞在は、他の年と比較しても滞在期間が長い。また、一度の滞在で五回もの展示会を行った年は他にない。昭和二一年野口が戦後長崎を訪れ、長崎を描き土地の人間との人脈を広げた一つの結実が、新聞社や行政、長崎人と行った、昭和二七年の五つの展示会と長崎の美女を描く企画の成功であったと考える。長崎県内の多くの地域で野口の活動を助ける環境が整っていったことがわかる。

② 独立展に伴う座談会で、野口は東京と長崎を比較した発言をしている。ここから野口が戦後地方都市を描いた背景には、拠点である東京を慌ただしく感じ、制作を行う魅力を感じていなかった点があげられる。これに対して、野口は長崎の街と人との雰囲気は絵を描くのに都合がよいものと述べており、東京にはない大らかさを好ましく思っていたようだ。野口が戦後長崎を頻繁に訪れた一因と言えるだろう。

しかし、戦後の復興計画による景観の変化が見られるようになると、昭和二七年野口は長崎が個性を失うことを危惧する文章を書くようになる。これ以降、野口を含めた芸術家たちから長崎の景観についての言及が度々行われるようになる。

この年以降、野口が長崎で個人もしくはグループで行う展示会はなくなり、以降の野口の長崎滞在は制作に重きを置く傾向となる。

昭和二七年は多くの事業を長崎の人間と共に成功させ、新たに変化する長崎の町について野口が動き出した年であった。

注

1 大塚信雄編『野口彌太郎画集』日動出版、一九八三年、一八八～一九三頁。
2 阿野露団『長崎を描いた画家たち（上）』形文社、一九八八年、二二～二五頁。
3 『長崎県教育史』長崎県教育委員会、一九七六年、一一九三頁。
4 大塚前掲書。
5 阿野前掲書。
6 大塚前掲書、三頁。
7 「野口菊枝日記」昭和二七年一月二九日。
8 『時刻表復刻版（戦後編）』「昭和二十五年十月号」一九七七年。
9 『夕刊長崎日日新聞』昭和二七年一月二七日及び『長崎市政展望第十二号』昭和二七年二月一〇日。
10 作品点数については『長崎日日新聞』昭和二七年一月二九日にも「俊鋭諸画伯が二十年を記念する力作約百点を出品、豪華な展覧が予想され」との掲載がある。
11 長崎市美術振興会については、昭和二五年長崎市美術展開催が契機となり結成された。『長崎民友新聞』二月一日には長崎市美術振興会も主催に入っていることから、末永の認識違いと考える。
12 入江清佳「長崎に関する昭和二六年野口彌太郎日記について」『長崎純心比較文化学会会報』第一三号、二〇一九年。
13 『夕刊長崎日日新聞』昭和二七年一月二七日。
14 『夕刊長崎日日新聞』昭和二七年一月二七日。
15 入江清佳「長崎に関する野口彌太郎の日記について」『長崎学』第二号、長崎市長崎学研究所、二〇一七年。
16 入江前掲論文、二〇一九年、一四頁。
17 「野口彌太郎日記」昭和二五年一月一四日。
18 『小説新潮』第五巻第十一号、昭和二六年、三九頁。
19 『長崎文化』第三号　昭和三四年一〇月一〇日。
20 『長崎日日新聞』昭和二六年五月三日。
21 『長崎日日新聞』昭和二六年五月三日。
22 『小説新潮』第五巻第十一号、昭和二六年、三九頁。
23 『野口彌太郎日記』昭和二六年五月一四日。
24 永井隆編『浦上天主堂』浦上天主堂、昭和二四年、一三頁。
25 大塚前掲書、一九九頁。
26 『長崎民友新聞』昭和二七年二月一日。
27 『長崎民友新聞』昭和二七年二月一日。
28 『長崎民友新聞』昭和二七年二月一九日。
29 『長崎日日新聞』昭和二七年二月一九日。
30 『長崎日日新聞』昭和二七年二月一九日。
31 『長崎日日新聞』昭和二七年二月四日。
32 『長崎日日新聞』昭和二七年二月四日。
33 『長崎日日新聞』昭和二七年二月四日。
34 鈴木信太郎『阿蘭陀まんざい』東峰書房、昭和二九年。
35 『長崎日日新聞』昭和二六年五月一八日。
36 近年の風景は多く地方の風土である。日本の地方の色の持つ特有の地色と、野口君の鮮明な感性とがそのままぴったり重なり合うだろうか。事実野口君は地方色を美しいと感じているのだから一向差支えない訳だが、その日本の地方色と鈍い光度、湿っぽい外気、その上埃っぽい燻んだ肌などが野口君のパレットに呼び寄せられるのは私には自然で

ないように思われて仕方ない。（中略）そして野口君が田園より再び帰って、都会の中心に画架を据えて、あくまで近代の動揺を聞きつつ、都会の色に没頭してくれることを望んでいる。野口君ほど都会の感覚に生きられる人はない筈だ。野口君よ、アイヌ族より都会の女を描いてくれ給え。（富永惣一「アトリエNo. 二九六」昭和二六年八月一日）

37 『長崎日日新聞』昭和二七年二月六日。

38 『長崎日日新聞』昭和二七年二月六日。

39 『長崎日日新聞』昭和二七年三月一日。

40 大塚前掲書、二〇〇頁。

41 『長崎日日新聞』昭和二七年三月二二日。

42 『長崎日日新聞』昭和二七年三月五日。

43 『長崎日日新聞』昭和二七年三月二三日。

44 『長崎日日新聞』昭和二七年四月一日。

45 大塚前掲書、二〇〇頁。

46 『長崎日日新聞』昭和二七年三月二六日。

47 大塚前掲書、二〇〇頁。

48 『長崎日日新聞』昭和二七年二月二八日。

49 野口彌太郎「長崎を愛す」（『造形No.23～24長崎の今昔特集』造形同人会、昭和三二年）

50 大塚前掲書、二〇〇頁。

51 入江前掲論文、二〇一九年、一四頁。

52 「本籠町にあったころの四海楼の奥の部屋は一時われわれのアトリエともなり、大浦辺でできた作品が次第に増えた。」（『長崎新聞』昭和五〇年二月七日）。昭和二十年代の四海楼は野口達の活動を支える場所であった。

53 大塚前掲書、二〇〇頁。

54 『夕刊長崎日日新聞』昭和二七年二月四日。

55 『創業百年創立五十年親和銀行史』（親和文庫第十五号、株式会社親和銀行、一九九一）及び『親和銀行三十年』（株式会社親和銀行、一九七二年、一一一頁）。

56 長崎歴史文化博物館収蔵「渡辺庫輔宛書簡　鈴木信太郎より　昭和二十九年六月二十三日　鈴木信太郎より」（収蔵番号：へ・一七・三四九）。

57 佐世保玉屋五〇年記念祭広報委員会編『佐世保玉屋五〇年小史』株式会社佐世保玉屋、一九六七年、一三九～一六七頁。

58 『野口彌太郎日記』昭和二四年一月一一日。

59 『婦人之友』第四十三巻第八號、婦人之友社、昭和二四年。

60 入江前掲論文、二〇一九年、一四頁。

61 『佐世保時事新聞』昭和二六年四月二三日。

62 『創業百年創立五十年親和銀行史』（親和文庫第十五号、株式会社親和銀行、一九九一年）及び『親和銀行三十年』（株式会社親和銀行、一九七二年、一一一頁）。

63 『佐世保時事新聞』昭和二六年四月二三日。

【付記】

本稿の執筆にあたって、以下諸氏よりご高配賜りました。皆様に対しまして心より感謝申し上げます。

野口家ご遺族　野口彌一様並びに野口美恵子様、鈴木伸子様
久保田環氏ご子息　久保田順一様